

『経絡正統』『引経口訣』について

山崎 陽子

日本鍼灸研究会

『経絡正統』『引経口訣』（中国医学科学院図書館所蔵）は、江戸前期の寛文4年（1664）に成立した浅井周伯（1643～1705）の俞穴書である。この両書は、江戸中期以降の鍼灸に大きな影響を及ぼした味岡三伯系統の俞穴学の解明にとり重要な意味を持つので、以下、両書の内容について検討する。

『経絡正統』二巻一冊は、上巻19葉、中巻26葉、計45葉からなる漢文体の俞穴書である。中巻の扉に「下巻者引経口訣同。今茲略」とある。また中巻末に「于時寛文四甲辰孟夏既望／周伯考之」とする奥書がある。本文では十二経脈ごとに所属俞穴の部位を解説している。上巻では腎経、胃経、肺経、脾経の4経脈、下巻では膀胱経、小腸経、大腸経、心経、心包経、三焦経、肝経、胆経の8経脈が扱われている。この経脈の記載順序は『十四経發揮』とは異なるが、配列及び任脈と督脈を含まない理由は不明である。各経脈の最初に経脈名と穴数が掲げられている。各俞穴の部位解説の表現は、取穴的な観点から、経脈又は俞穴の位置との関係で述べることを通例とするが、こうした表現は他に類例を見つけない。解説における引用には、当時もっとも正統的な経脈俞穴資料である『靈枢』経脈篇、『十四経發揮』、『類経図翼』のほか、『靈枢』寒熱病篇及び背俞篇や『素問』骨空論、『甲乙経』『明堂灸経』『銅人』『資生経』『医学綱目』『神応経』『医学入門』、並びに『本草経』『左伝』が見られる。注目は巻末で述べられている「銅人引経」と「引経之五色」である。これは銅人形に彩色された経脈を引き、それを基礎に俞穴を定める方法で、部位や穴名の俗名の指摘とともに、味岡系俞穴学の特徴である。

『引経口訣』二巻一冊は、巻上54葉、巻下22、計76葉からなる漢文体の俞穴書である。巻上と巻下の表紙に「（周伯先生）引経口訣」とある。巻上の文末に「于時寛文四甲辰孟夏既望／洛下伊藤／周伯撰印」、同じく奥書に「正徳元年辛卯年八月日／杉山氏本書写之須田松栄」とある。また巻下の奥書に「駒埜三氣伝来」の一行、及びその下に「門人 三町周伯／門人 為竹一抱子」の二行があり、更にその左傍に「右一抱子伝来写之」とある。また巻上の「十四経俞穴凡例」の題下に「為竹一抱子」の五字がある。これらから、本書は駒埜三氣（味岡三伯）の伝授による浅井周伯の著作で、伝本に岡本一抱が関わっていると見るのが妥当である。巻上では「十四経俞穴凡例」「骨度」に続いて、督脈、任脈、腎経、胃経、脾経、肝経、膀胱経、胆経、大腸経、小腸経、三焦経、肺経、心包経、心経の順序で、所属俞穴の部位を解説している。既に「味岡三伯『医学至要抄』の俞穴学」（第十八回日本鍼灸史学会学術大会）で明らかにしたように、この部分は巻下の「奇経八脈」とともに、著者未詳の俞穴書『医学至要抄』（元禄12年〔1699〕刊行）と類似し、味岡三伯伝とされる俞穴書『家伝十四経』（寛政4年〔1792〕写）とは、一層一致する。巻下では「奇経八脈」「内経十四経引経分」「内経引経序」で奇経と引経を述べ、次いで「取穴寸説」「中指同身寸法」で取穴の寸法を論じた後、頭、胸、腹、背、側胸、肩肘、髀脛の七部に分けて53穴の部位と鍼灸法、主治を述べ、末尾に奇俞として腰眼、風市、阿是を付す。「取穴寸説」以下は、後年、『灸法要穴』と題した写本で流布し、また『経穴機要』と題して刊行された部分に該当する。末尾に穴図が何枚か付されている。

構成や内容の異なる『経絡正統』『引経口訣』が同じ年に成立した理由は未詳であるが、既に両書には味岡流の俞穴学の方法（引経分色）が確認できる。周伯はこの年まだ21歳、その内容が味岡三伯の伝授によることは確実である。その内容は改訂され、周伯晩年に『医学至要抄』『経穴機要』と題して、著者を記すこと無く刊行されることになる。